

水の思い出 ④6

我が家の庭先に小さな井戸があります。ほんとに小さくて浅い井戸ですが、岩の間から水が湧き出していて水量はあります。水道パイプで玄関前に引き、初めて訪れる方に「玄関の水道出しっぱなし!!」と間違われたりしています。

常陸太田市に引っ越してきて数年は、ものめずらしさもあって、毎朝、この井戸水で顔を洗ってから登校していました。真冬にも外で？寒くないの？と思われるかもしれませんが、意外と冷たくなくて快適でした。

高校生のときは自転車に夢中で、暇さえあれば走り回っていました。日立、大子、水戸、福島や栃木、どこに行っても、家からR349号まで、最初の1kmは下り坂、最後の1kmは上り坂で、普通に考えると最後はノンビリと登ればいいのに、全力疾走!家に着くなり自転車を放り出して井戸に直行。特に夏場は、蛇口の真下で大口を開き、空を見上げながらガブガブと。

おいしかった。名水でもなんでもない、ありふれた井戸水がどんな飲み物よりも。

そんな日々から10年余り経って、いまもたまに顔や手を洗ったりはしますが、飲んではいません。うがいをしたりというように、口の中に入れることさえもしません。水質が～ということではありません。常陸太田の里山は、まだきれいに残されていて、あの頃と変わらない水が湧いています。

ただ、学生時代、体中に熱いものが流れていて、全力で駆け抜けていた日々をいつまでも心の引き出しにしまっておきたいので…

(春友町 武藤 邦宏)



上深茨町 細田西

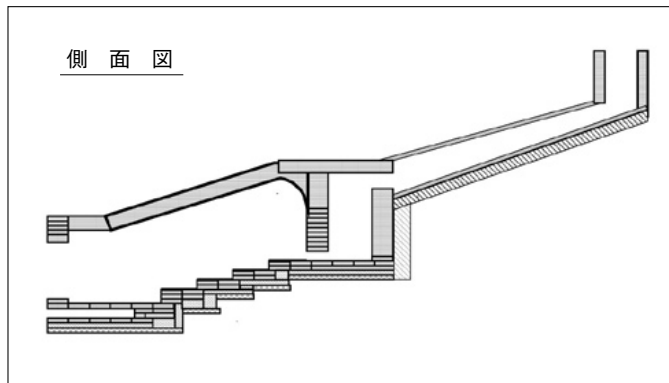
土と炎の祭り

土と炎の芸術といわれる陶芸。陶魂クラブの皆さんは、増井町にある穴窯「おおた窯」で6月と12月、年に2回、4日間かけて焼物を焼いています。

約50人の会員が6時間ずつ交代で窯焚きの当番をし、夜は自然と人が集まり、肉や野菜、魚介類を持ち寄ってバーベキュー風楽しんでいました。
(武藤 邦宏・高橋 靖浩・塩原 慶子)

おおた窯は(財)グリーンふるさと振興機構とボランティアの協力で造られた穴窯です。完成後、「この窯を利用しながら守っていききたい」というメンバーが陶魂クラブを立ち上げました。

穴窯は登り窯と同じく薪で焚く窯です。登り窯は薪をくべる部屋があり、1の間、2の間…と作品を入れる部屋がありますが穴窯は、薪をくべる部屋に作品も入れる形になっています。



おおた窯 図面



最高温度1300℃、近づいただけでも熱い!!



これだけの薪も1回焚くと、大半が無くなります

陶魂クラブで定例会というとな薪割りのことです。1回に800~1000束(買ったなら20万円以上!!)の薪を使うので、毎月、第1土曜日に集まって、半年間かけて薪を準備します。

民間や公共の施設などから、不要になった松を貰ったりしています。



油圧式の薪割り機

次回、12月3~6日の窯には一般の方の作品も入れられます。10月中旬からの募集で、**有料**です。数や大きさに制限があり、希望者多数の場合、お断りすることもあるそうです。

詳しくは会長 諏訪さんにお問い合わせください。入会希望も随時受け付けています。

陶魂クラブ会長 諏訪 幸雄 常陸太田市三才町625-6

TEL&FAX 0294-72-7391 携帯 090-1804-3701
mail : ysuwatogei109@biglobe.ne.jp



窯の中と外、協力してつめます

お米と同じく「初めチョコチョコ、中パツパ」
最初は窯の外で薪を燃やして、温かい空気を送り、少しずつ温度を上げていきます。

2日目以降、1250℃位を維持するために5分～10分毎に10数本薪を放り込みます。それに応えるかのように、のぞき口や煙突から炎が吹き上がります。

窯詰め

同じ窯の中でも、入れる場所によって、作品の出来映えが変わってくるので、焼き上がりを想像しながら詰めていきます。

焚き始め

時計と温度計を見ながらチョコチョコと



食事もしみの一つです

2日目、3日目の夜は煙突から炎が吹き上がり圧倒されます



窯出し
窯の中の空気はまだほんのり暖かいです



自然に冷まして窯出しです。
長い焼成から開放された壺や器は、なんともいい難い釉薬ゆうやくの流れ跡が出て、激しい炎の勢いを感じる作品となりました。

うわ薬をかけたように見えるのは、灰が高温でとけ作品にくっついてガラス状に固まったもので「自然釉ぜんゆ」といいます。

どんな作品になるか窯から出してみるまで分からない、世界に1つだけの「作品の持つ景色」が穴窯の魅力です。



1点ずつ手渡して出します

焼きあがった作品まさに会員皆さんの汗の結晶

作品の完成まで

1週間前
窯詰め



1日目
午前7:00
焚き始め



3日目
焼成中



4日目
午後2時
終了

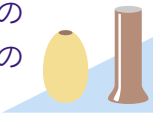


2週間後
窯出し
完成!!



今回は12月3日～6日、夕間に浮かぶ幻想的な炎を見に行こう。

土が、人の手によって自由に形を与えられ、作品になっていく。陶芸は趣味の中でも多くの人が興味をもたれるものではないでしょうか。自然に囲まれた創作の場は、楽しい笑い声の響く交流の場でもありました。常陸太田市の趣味の拠点をご紹介します。



はるとも
春友手づくり工芸センター



春友手づくり工芸センターには、創作室が3室あります。創作活動が活発に行われており、大勢の趣味愛好者で毎日



本焼き後の窯だし

のように賑わっています。見学した日は「ろくろ会」「陶岳会」「釉の会」の皆さんが創作中。素

焼き窯、本焼き窯、電動粘土練機、電動ろくろなど陶芸に関するあ



らゆる道具が設置され、他に七宝・彫塑の教室も開催されています。陶芸愛好者は多く、空いている教室が少ないそうで、ちょっと足を延ばすと、交流センター楓(金砂郷)、こしらえ館(水府)、梨木平工



芸の森(里美)の同様の施設でゆったりと大作に挑むこともできるようです。

こしらえ館(水府)



水府海洋センターの隣りに郷土文化保存伝習施設「こしらえ館」があります。仕事を持った人にも陶芸を楽しんでもらえるよう毎月第2・4日曜



日に陶芸教室が開かれています。また、平日は陶芸教室を終えたグループが自主サークルとなって楽しく創

作を続けています。市内には合併前の4地区にこのような施設が整備されていてそれぞれに興味のある施設の中



たたら(粘土を板状にする機械)

で、「つくる」楽しみにひたったり、趣味のあう仲間づくりの場として利用されています。



なしきだいら
梨木平工芸の森（聖美）



見逃しがちな案内看板をもとに山道を登ると、「梨木平工芸の森」が広がりゆったりとした駐車場の奥に別荘のような趣の建物が見えてきます。ログハウスのような造りで、森に囲まれた静かな雰囲気の中、陶芸などの趣味にひたるにはもってこいの場所といえます。道具類には事欠か

ない上に月2回、第1・3火曜日に陶芸教室が開催されており、初心者でも申込みできるそうです。



電動ろくろ



かえで
工芸交流センター楓（金砂郷）

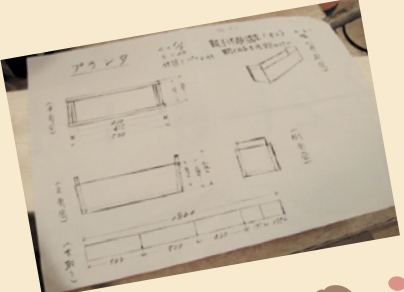


こちらは4方向に傾斜する屋根面をもつ寄棟造で屋根中央に高窓を配した清楚なイメージの建物。親子木工講座があると聞いてお邪魔しました。建屋に入ると自動カンナ台をはじめ木工用機械が沢山あるのに驚きました。その日は、植木鉢やプランターを入れる箱を楽しそうに作成していました。飾り窓にお星様やハートマークを加工しており、親子とも一心

不乱に作業していて「私のほうがはまってしまいました」というお父さんもいました。ここに



は陶芸・草木染の道具も備わっているうえに、陶芸に関しては電気窯、電動粘土練機、電動ろくろと道具が豊富でした。施設利用にはゆとりがあり陶芸を学ぶグループにとって穴場といえます。



電動粘土練機



草木染室



『ニンジン畑から』

先日春ニンジンの収穫後の片付けをしていると、ある所に大量のミミズが団子状に絡み合っている。よく見ると取り残したニンジンが腐りつつあり、それにミミズが群がっていた。ミミズが沢山生まれることは、土が健康に循環していくことの第一歩。栄養価があり消化吸収の良いニンジンミミズも大好きなのだろう。

我が家ではニンジンには春と夏の2回播き、主に夏に播いたニンジンは、秋から冬に収穫して、豊作なら余剰分を人参ジュースにも加工している。余ったニンジンがもったいなくて始めたジュース加工(委託)だったが、なかなかニンジンよりも売れ行きが良い。栄養豊富なニンジンを、手軽に摂取でき、野菜嫌いの人にも飲める味が人

気のようなだ。

しかし生産者としてはどこかもどかしさが残る。なぜかという、ジュースに加工する場合、皮は土が混じる可能性があるため、完全にむかなければならない。そして遠くの加工施設まで運ぶので燃料とコストもかかっている。商品にするためには仕方ないことなのだが…。そこでおすすめは自家製人参ジュース!ニンジンは適当に切って、ひたひたの水から茹でて、冷ましておく。りんごジュースを加えて、ミキサーにかける。生を絞るより楽で、丸ごとのニンジンが飲めます。ぜひ試してね。

(木の里農園

布施 美木)



子育て奮闘記

踊るママパラダイス ④

このコーナーを始めて随分になるせいか時々以前何を書いたのが忘れてしまいます。重複するわけにはいかないのでインターネットでバックナンバーを確認してみました。

8年分の文章を読み返すとその頃のことを懐かしく思い出したり、自分の経験不足を恥じたり色々感じます。当時と全く考えが変わらないことや、逆に全く違う事を考えていたなと発見して人は変わるものだ実感します。

変化するという事は進化なのか退化なのか。何はともあれ今の私は自分を卑下することも少ないし、「まだまだのんびりでもいいから、やりますよ。」と考えているので悪い変化ではないと思っています。

これは以前にも書いたことですが、自分の成長は子どものおかげだと思います。子どもが失敗したり立ち止まることがあると、母親の私も同じように立ち止まり、悩み苦しみます。結婚したばかりの私なら落ち込みつばなしてあった事も今なら「これはチャンス。」と、深呼吸をした後でニヤリと笑える。「今のトラブルは今後の成功。」そう思えるようにしてくれたのは子ども達と一緒に歩いた時間です。

抱いたりおんぶしたり歩いてきた時間。この先私が歩けなくなったら今度は子ども達に手を引いていただきましょう。その時わが子たちはどう成長しているでしょうね。

— わいわいネット 織田 裕子 —

スミレもその内変化するよ♥



時を駆け抜けた人たち



光圀公を敬慕 梅津 福次郎 翁



梅津会館と梅津翁の銅像

福次郎は、安政5年(1858年)、旧太田村下井戸に生まれました。奉公の身から少壮にして北海道の函館に渡り、天秤棒行商から、一代で梅津商店の財を成し、得

を敬慕していました。

かつて、太田町町長であった武藤常介氏は、西山修養道場(現西山研修所)建設資金造成のため、函館を訪れ、梅津翁に篤志を願いました。そのときの翁は「郷土の偉人義公德川光圀卿を崇拜し、その英風を追慕していた」ことを語り、「日ごろの倦念を吐露され、欣然として財を投ぜられた」と、井上一著『梅津福次郎小傳』の「所感」にあります。



故郷を偲び立つ墓石

開国後の日本を世のため、人のためと時を駆け抜けた人、梅津福次郎翁は、今望郷函館山のふもとに眠り、郷土太田の石材を使用したその墳墓は、太田を向いてりりしく立っています。

たお金は世のため、人のために寄付しました。

梅津商店の店舗は、函館の一等地、繁華な十字街に角店を設けながらも、4度の火災に遭っています。しかし、丸裸になっても、「他の商人が精を出さない日も、陣頭指揮で働く」という商人魂の才覚を発揮し、世のため、人のための奉仕の心は止むことはありませんでした。商業道の『売手よし、買手よし、世間よし』の「三方よし」の考えで、慈善事業や信仰心溢れる喜捨の遺業は、郷

福次郎の遺業により建てられた梅津会館(平成11年登録有形文化財指定)、西山山腹の久昌寺、重厚な木造建築の西山研修所などの典雅な建屋は、今の世にひとときわその異彩を放ち、光彩を増して、人々に何をか語らんとしています。

福次郎の頌徳の証は、久昌寺『梅津氏碑頌』、西山研修所『流芳千載』、若宮八幡宮『梅華春津』、梅津会館などの金石文に印され、それぞれの頌徳碑を、福次郎を偲び訪ね歩いてはいかがでしょう。



函館市十字街の梅津商店

里太田ばかりでなく日本各地にわたり、その枚挙にいとまがありません。

福次郎は郷里ゆかりの光圀公

(石川 誠)

生涯学習情報誌「フォズ」は、全世帯に2~3ヶ月毎に配布され、大きな宣伝効果が期待できます。ぜひご利用下さい。

- ◆広告を募集している情報誌 平成21年12月から平成22年4月までに発行予定の生涯学習情報誌「フォズ」第48号から第50号
- ◆広告料(1回あたり)※会長が指定するページの最下段
 - ① 縦4.5cm×横 8.8cm/10,000円
 - ② 縦4.5cm×横17.9cm/20,000円

問合せ フォズ・ネットワーク事務局 TEL:0294-72-8888
(生涯学習センター内) URL:http://edu.city.hitachiota.ibaraki.jp/gakushu/

リレーエッセイ「思い出の絵本」『いつでも会える』～46～ (幡町 渡邊 恵子)

身近な大切な人が突然いなくなってしまうたら…そんな想像をする事はありませんか？あるいは既にそのような経験をした方もいると思います。

そんな親しい誰かとの別れを描いた絵本、菊田まり子さんの「いつでも会える」を紹介します。主人公は人ではなく犬のシロです。シロは飼い主のみきちゃんが好き。ところがみきちゃんがある日、突然逝ってしまいます。犬のシロには“死”が理解できません。「どうして？みきちゃんはどこ？…そしてぼくはふこうだった…。」そんな悲しみに暮れるシロが立ち直るまでに見つけた答えとは…。

この本のさし絵、文章、共に短くともシンプルですが、それ故に直接心に響くものがあります。また物語が人間のみきちゃんではなく、犬のシロの目線で語られる事によって、単なる“生き物を大切に”では終わらない深いメッセージが読み取れます。

実は書店で何気なく手に取って、初めて読んだ時には思わず涙ぐんでしまいました。(もちろん、ちゃんと買いました。)何度も読み返しては、その都度感動してしまいます。大人はもちろん、子供にも“死”というものを考えさせる秀作だと思います。

先日、小学生の息子にこの本を音読してもらいました。読み終えた後、彼の感想を聞いてみました。「なんだか悲しい。でもシロは不幸ではないんだよね。」そして、私からプレゼントされたこの本を、こっそり読み返しては私と同じように毎回涙ぐむのでありました。

(次回は 大里町 斎藤 由美子さん)



ほつとひととき クワゴ

絹糸をとるカイコの野生の原種です。幼虫はカイコ同様クワの葉を食べて育ちます。カイコはこのクワゴを改良したものです。



カイゴは白色をしており、白色のマユをつくりますが、クワゴの羽根はうす茶色で黄緑色の大変美しいマユをつくります。このマユから作った織物は「天蚕」と呼ばれ、大変貴重で高価なものです。

幼虫は、驚くとまっすぐに伸びて、クワの枝そっくりとなり、鳥の目をごまかします。

(佐藤 清)

ちよつとひととき 「バナナムーン」



運ばれてきたお料理を見て思わずつぶやいてしまった。「すてき、きれい」白い器に盛り付けられた一品はまるで絵画のごとき美しさ…メインのお肉も、ソースの深い味わいも、添えられた季節の野菜の彩りも、すべてが料理人の技によって緻密に仕組まれた楽しい物語のようです。さあ、

あとは主人公になって「おいしい物語」を存分に味わって下さい。

(菊池 幾子)

住 所 常陸太田市馬場町85-1

営業時間 ランチ:11時~2時(ラストオーダー)

ディナー:5時30分~9時(ラストオーダー)

定休日 日曜日(祝日休みの時もあり) TEL 0294-51-5901

お勧めメニュー/常陸牛のビーフシチュー・ディナー:1,580円など

常陸太田の今昔 No.3 上宮河内(金砂郷)

昨年行われた地元学事業の中で、貴重な映像が見つかりました。地元の大谷一郎さん(撮影:黒沢日出男さん)が大事に保管なさっていた8mmフィルムには昭和30年代の体育祭や給食、敬老会などの映像が残されていました。白いブラウスに長いプリーツスカート姿で懸命に走るお母さんや、裸足で運動場をかける子どもたちとお父さん。敬老会では衣装をまとうて軽妙な踊りを披露する人々、にこやかに舞台を眺めるお年寄りたちのほほえましい光景が撮られています。昔分校があり、

子どもたちの声が響いたであろうこの場所には今「金砂の湯」があります。この映像は会館内で流されており懐かしい映像を見ることができます。



昭和30年頃

当時の子どもたちがもしかしたらお湯に入りきっているかもしれません。思い出とお湯にひたりに…。

(塩原 慶子)



現在